

おわりに

「こりゃあ閑話」とは変わった題目だと思いながら、ユニークなエッセイを毎号の道借誌上に楽しんでいた。2007年10月末に、この筆者の富岡隆夫さん（以下隆夫さん）が脳梗塞にて倒れられたと道借編集部より連絡を受けた。早速、富岡訓子夫人に電話したが残念なことに重度の脳梗塞と確認した。

2005年の12月の大阪俳句会へ横浜から隆夫さんが出席してくれた。句会が終わって句友の井村隆信さんと新大阪へ彼を見送り、時間待ちの間に3人で痛飲した。元気で雄弁だった。大阪はやっぱり良いとこだと上機嫌で帰宅したと後に夫人からお聞きしたことをすぐに思い出した。

脳神経の回路の崩壊は再生しないと言われていたが、かなりの程度代替されうる例が近年蓄積され重度の脳梗塞も根気よく刺激とリハビリを繰り返す必要があると夫人に伝えたように思う。

2009年10月に2年を経過したところで、恐る恐る夫人に電話したが、症状に大きな変化はないと涙声であった。しかし、車椅子のままレストランへ連れて行ったとかメガネをかけさすとじっと文字を見たとか、常に介護している者には分からなくとも、たまに症状を聞いた者には進歩が感じられた。そのとき夫人から道借の「こりゃあ閑話」を小冊子にして隆夫に見せてやりたいので、原稿が残っているか道借の編集部にお尋ねしてほしいと頼ま

れた。このとき「こりゃあ閑話」を夫人が「こりゃあかんわ」と言われたことで、隆夫さんのユーモアのセンスがこの題名にあることを初めて知った。

道借を発行しておられる心齋橋総合法律事務所の弁護士本渡諒一先生にお願いしたところ、小冊子はこちらで作らましょと暖かいお言葉を得て、夫人も喜ばれた。かくて本渡先生、道借編集長の高階千賀子さん、そして私が、編集に携わることとなった。

さらに、隆夫さんは俳句もやっておられたことゆえ、俳句の部も加えられたらということにもなった。俳句の選句は富岡夫妻の知己でもあった、扉俳句会同人代表の大槻一郎先生が引き受けて下さることとなった。

以上が本冊子のできるまでの概略であります。この発行に力を注いでいただいた本渡諒一先生、高階千賀子編集長を始め道借倶楽部の方々に心より御礼申し上げ、また、俳句の部の選句編集をいただいた大槻一郎先生に深謝いたします。

この小冊子を著者富岡隆夫さんがメガネをかけて見ていただいて、「こりゃあかんわ」など言わず、さらに回復へむけて歩をすすめられる刺激になることを願っています。

平成22年2月 富岡夫妻同窓生 中野 陽典